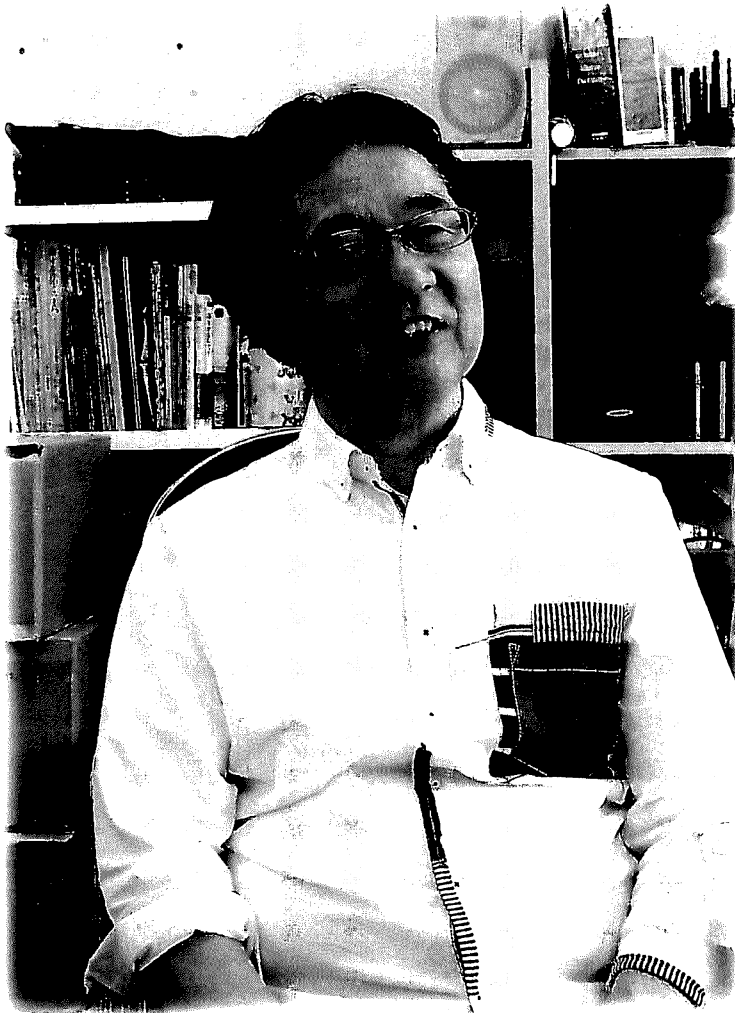


さいたまここに人あり



コカリナ奏者 黒坂黒太郎さん

ハンガリーの楽器コカリナを日本の木工技術でよみがえらせた黒坂黒太郎さん。フォークシンガーとして、コカリナ奏者として、水俣病などの環境問題や平和、核兵器廃絶、震災支援などで作詞・作曲、コンサート活動をおこなってきました。東日本大震災被災地の子どもたちと一緒に支援コンサートにも取り組み、北海道から沖縄まで全国各地での4000回におよぶ公演活動で、地域の人々を励ましてきた黒坂さんに、ご自身の精力的な活動の原動力やコカリナの魅力などを聞きました。

コカリナで
全国各地を励まし続けて

震災支援で全国を演奏

いま、全国で震災支援コンサートにとりくんでいます。これまで93回やってきましたが、100回を目指しています。経費以外をすべて、地域の教育委員会など、被災した子どもたちのために使われるようにと寄付しています。たくさんのおみなさんに思いを寄せていただきましたね。

この前は石巻市の小中高校生たちと一緒に、神戸でコンサートをしました。子どもたちは、ちよつとのきっかけをつくってあげると、いろんな発想で自分たちのかたちをつくっていきます。やっぱり子どもっていいなあ、とあらためて思いました。

彼らは家族や友だち、先生をなくしていたり、心にたくさんものを抱えています。彼らの力になれたらな、と思っています。

これまで、阪神淡路大震災、中越地震、東日本大震災と、震災の支援に関わってきました。「とにかく現場を見てくれ」という声とにかく行ってみて、「自分

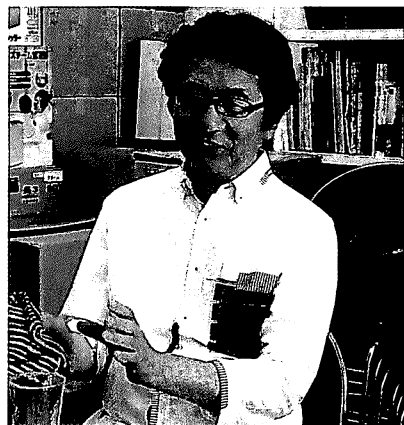
に何ができるのか」と考えながらやってきました。僕はこれまでに、全国でたくさんの方のコンサートをやってきました。そのなかで、人とのつながりもできました。そういうなかで声がかかると、何とか力になればと思つて続けてきたんです。

音でよみがえつた高田松原

今回の震災では、石巻ですつとコンサートをやりました。震災後に、石巻でコカリナをやっていた知り合いと連絡がとれずにいたんです。彼はいまでも行方不明なんですけど、その知人を訪ねて震災1カ月後くらいから被災地へ通いました。石巻でコカリナのコンサートもありました。そのなかで、門脇小学校の門前の松が倒れる危険性があるから切らなきゃいけないと聞き、「それじゃあ、その松の木でコカリナをつくらう」と呼びかけて、門脇小の全校生徒にその松の木のコカリナをプレゼントしました。

そうしたうわさが広まって、今度は陸前高田からも声がかかりました。子どもたちに声をかけると「吹いてみたい!」と言うので、じゃあ倒れた松の木でコカリナをつくってみんなで演奏してみよう。そうすると、地域のひとたちも製材などで協力してくれて、市内の全小学校の子どもたち1000人と、先生方も欲しいというので1200本をプレゼントしました。子どもたちも大変喜んでくれました。

それまで私は陸前高田を訪れたことはなかったんですが、地元の人たちは、松





長野県「無言館」成人式で（2013年4月28日）

原は本当に美しいところだったと言っんです。その松原が、震災の津波で流されてしまっ。奥さんとお母さんを津波で失った小学校の校長先生は、「松原は私たちにとって宝物だった。こうして松原の松が手元に戻っきて、子どもたちもだけど、私も本当にうれしい」と涙を流して喜んでくれました。

その後、石巻や東京のみんなで陸前高田の一本松の前でコンサートをやることになりました。地域のたくさんさんのひとが来てくれて、「松原の風景が音としてよ

みがえった」と言ってくださいました。陸前高田では、いまでも社会教育として地域のひとたちがコカリナを演奏してっれています。

今回発売されるCDは、津波で流れ着いた陸前高田の被災した松とカエデでバ

高校生と国連に

今年で音楽生活40周年を迎えます。コンサートのは、他の人に負けない自信がありますよ。

そのほかにも、本当に様々なことをやってきましたね。国連に高校生の声を届けようと、「ピースボイス」といって広島・長崎の高校生たちをニューヨークの国連まで連れて行ったりもしました。

最初は、水俣病の患者さんたちと国連に行っ、水俣病をテーマにした「WE CAN STAND」といっう歌を一緒に歌って訴えたんです。そうしたら国連のロビーに広島・長崎の展示があっった。広島・長崎の高校生たちをここに連れてきたらいいなあと思っったんです。

それから毎年、15〜16人の子どもたちと一緒に行くようになりました。せっか

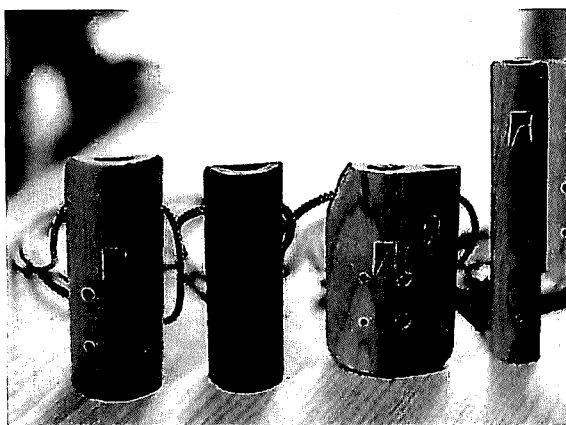
イオリンを制作した中澤宗幸さんと、奥さんでバイオリニストの中澤きみ子さんとのコラボレーションです。高田松原をもう一度音で復活させたいと、「REBORN」（＝生まれ変わる）と名付けました。

行くんだからとたくさんの子どもたちに平和への願いを書いてもらっ、それを国連の事務局長さんに手渡したりしました。60〜70人の高校生を国連に送りましたね。その後イギリスからも誘いがあっ、イギリスの核廃棄物処理場を訪ねて、地球一周したり。楽しかったですね。

その頃から毎年、広島に行っ、高校生とコンサートをしていました。当時は高校生平和ゼミナールがさかんで、子どもたちと一緒にコンサートもやってきました。彼らと一緒に「ヒロシマスチューデントアピール」といっう歌もつくりました。このときは、年間130回とかコンサートをやっっていたんですよ。

「野」を行こう

もともと高校生のときに、吹奏楽でフルートを演奏していました。その後大学に入ると、「音楽は世の中を動かす言葉がない」と、フォークソングに傾倒していったんです。ちょうどアメリカのウディ・ガスリーとかピート・シーガーがいた。世の中が動いている時代でしたから、世の中のいろんなことを歌にして訴



コカリナ

えていくことに惹かれたんです。大学でフォークソングやうたごえに関わって、大学2年生のときに「広場と僕らと青空と」をつくりました。

大学では教員免許もとったけど、もつと音楽をやりたいと思って、在学中に作曲の勉強をはじめました。そんなときに水俣病の少女をテーマにした「WE CAN STAND」という詩に出会いました。その詩に音をつけてコンサートで演奏したらとても評判で、レコード会社を紹介されました。レコードとして初回プレス3万枚が売れました。

でもその後、LP盤のレコードを2枚

コカリナに魅せられて

1995年に友人がハンガリーのお土産でコカリナを持ってきたくて、「これはおもしろい」と思いました。ハンガリーのコカリナを初めて見たときは、オモチャみたいなものでした。だけど、日

くらい出したんですが、レコード会社とあまり合わなくて…。時代はフォークソングからニューミュージックが流行りだした頃だったんです。でも僕はあまりニューミュージックは合わなくて。

そんなときに宮本常一という先生に出会って、「お前のやっていることは、すごく大事なことで」と励ましてくれたんです。先生は日本中を訪ね歩いて、その地の人々を励ますという民俗学の先生でした。当時、僕は水俣など地域の公民館での公演活動をしていました。この宮本先生の言葉を聞いて、「野を行こう。地をめぐっていこう」と決意したんです。そして、レコード会社をやめました。そうして、僕は音楽、歌をやり続けてきたのですが、ひょんなことからコカリナにとりつかれてしまったんです。

本の木工職人がつくれば、もつといいものができるんじゃないかと感じました。

いま僕が演奏しているコカリナは、日本の木工技術がないとつくれない。これは、秋田県のタンス職人に「こういうも



東日本大震災復興支援コンサート in ウィーン (2012 年)

のをつくってほしい」と言ったら、「難しい」と言いながらも、コカリナをつくってくれました。だから、職人さんによって木の種類で得意なものが違う。コカリナは、ハイテクの工場じゃつくれない、すごく繊細な楽器です。木を加工する職人さんだけでなく、その道具をつくる

黒坂黒太郎 (正文) 40 周年コンサート

2013 年 8 月 31 日 (土)

13:30 開演 (開場 12:30)

東京芸術劇場 コンサートホール

出演

黒坂黒太郎 (コカリナ・うた)

安田雅司郎 (ギター)

FUKUZAWA Tatsuro (ピアノ)

矢口周美 (うた)

黒坂周吾 (和太鼓)

日本コカリナアンサンブル (コカリナ合奏)



チケット料金 S 席 ¥4,500 円 (¥5,000)
A 席 ¥3,500 円 (¥4,000)

主催：黒坂音楽工房

後援：NPO 法人コカリナ協会

お問合せ：黒坂音楽工房

〒136-0072 東京都江東区大島 5-34-17-202

tel.03-5626-1581 fax.03-5626-1568

鍛冶屋さんの技術もすばらしい。そういう技術がこの小さな楽器に集まっているんです。
日本の職人さんたちのおかげで、ぜいたくな音楽をさせていただいてます。
被災地の公演では、言葉が出ない、言葉にできない。「今日は歌えないな」と感じる場合があります。そういうときは、歌を減らしてコカリナの演奏を増やしたりします。コカリナのメロディだけのほうがいい、そのほうが伝わるといふこともあるんです。木の素材のやわらかさ、

やさしさで聴く人を包んでくれる。大学生時代にフルートをやめたときと、正反對のことが起きたんです。
いま、全国でコカリナが広がっています。各地でサークルをつくって、コンサートで一緒に演奏してくれる。コカリナはソロもいいけど、合奏がすばらしいんです。一人じゃ上手な演奏ができなくても、みんなが集まると迫ってくるものがある。形を追うんじゃなくて、そこにいる人と音楽で対話ができる。コカリナはとっても奥が深いんです。